114
A2304

日本政府ト東洋銀行トノ間ニ取結タル條約ハ
千八百七十五年一月三十一日ヲ以テ滿期トナ
スナリ故ニ一月三十一日以後ハ東洋銀行ト造
幣寮トノ間更ニ關係ナカルベシ而シテ此ノ期
ヲ過ギ造幣寮開閉ノ如何ハ銀行ノ知ルベキ所
ニアラズ依テ之レヲ公論セバ東洋銀行ニ於テ
十月三十一日以後造幣寮ニ再ビ雇入レン為メ
某人トノ間ニ條約定ヲ取結ベキノ理ナシ
又律法ヲ論ズルモ千八百七十五年一月三十一

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈
1046

日以後ノ條約ヲ東洋銀行ト其人トノ間ニ取結フベキ理ナシ而シテ一月三十一日後ノ條約ハ政府ノ擔當スベキモノナリ

然ルヲ右ノ理ニ拘ハラズ千八百七十五年一月三十一日ヲ過ルト雖モ尚取消ニナラザル所ノ條約ヲ東洋銀行ニ於テ既ニ取結ベリ

右ニ付起ル所ノ一疑問アリ則左ニ述ブル如シ

政府ニ於テ右ノ條約ヲ領承セズメ而メ此迫雇ヒシ所ノ人々ヲ千八百七十五年一月三十一日以後尚再ビ雇ハザルヿヲ東洋銀行ニ告ゲナバ

其結局如何ニ至ルベキヤ

右ノ回答則左ニ述ブル如シ

東洋銀行ニ於テ右條約滿期ニ至ル迫給料全額ヲ拂フヿヲ其ノ條約ヲ取結ヒシ人々ニ依テ要セラル可シ又之レヲ委託セスンハ條約ニ違背セシトシテ償金并ニ一ヶ年間ノ給料ヲ拂フヿヲ要セラル可シ

然ル時東洋銀行ニ於テハ其ノ條約ヲ取結ヒシ人々ニ拂渡シタル所ノ全額ヲ政府ヨリ秋銀行ニ拂返サンヿヲ要ス可シ

大藏省

政府ニ於テハ如此金ヲ納フヲ拒ミ而シテ前ニ述タル所ノ理ニ基キ如此條約ヲ結ブハ東洋銀行ノ權ニアラザルヲ申述可シ

政府ニ於テ東洋銀行ノ取結タル所ノ條約ヲ免シ而シテ造幣寮ニ此レ迚雇ヒシ人々ヲ夫ノ儘在寮セシヲ欲スルト見做セバ政府ハ一月三十一日以後東洋銀行ト在寮ノ人々トノ間ニ取結タル條約ヲ領承シ而シテ給料ヲ其ノ本人ニ拂フ可シ

今茲ニ起ル所ノ一異論アリ則左ニ述デル如シ

東洋銀行ト某人トノ間ニ取結ブ所ノ條約ノ儀ニ付先立テ政府ニ相謀ラズ只銀行ノ獨斷ヲ以テ條約ヲ取結タル後ニ至テ我銀行ニ於テ既ニ條約ヲ取結タリト政府ニ告ゲテ以テ領承セシメント為スヿ之レナリ而シテ若シ東洋銀行ニ於テ一月三十一日以後一年間條約ヲ取結ベキ權ヲ有セバ十年間之レヲ取結ベキ權ヲ有ス可シ然ル時ハ實ニ東洋銀行ニ於テ明日某數ノ新條約ヲ取結ブトモ政府ハ異論ナク其ノ滿期ニ至ル迄之レヲ領承スルト同一ナリ

若又政府ニ於テ此ノ如キ約定ニ從テ彼等ニ其俸ヲ給シ因テ以テ其約定ノ正當ナルヿヲ許諾セハ政府何ゾ是等ノ約定ノ今存在スル者幾何ナルヲ知ルベキヤ今十數名ノ英人各五箇年ノ約定ヲ受ケ將ニ英國ヨリ來ラントスルモ亦知ルベカラズ若シ政府一人ノ俸ヲ給セバ則チ此處置ヲ以テ約定ノ理ヲ許諾スルナリ而シテ衆人ノ俸ヲ給セザルベカラズ

約定ニ違背シテ處置スル一切ノ事件ヲ當然トシテ許諾スルハ甚タ危殆ノ事ナリ是レ其ノ不良ノ定例トナルヲ以テナリ抑日本政府ノ定メタル約定ハ百ヲ以テ數フ是故ニ政府ハ特ンテ以テ其幣ヲ防護スル所ノ道ハ他ナシ何如ナル事情アルヒ其約定ニ恪遵ス當キノ理ヲ主張スルニ在ルノミ

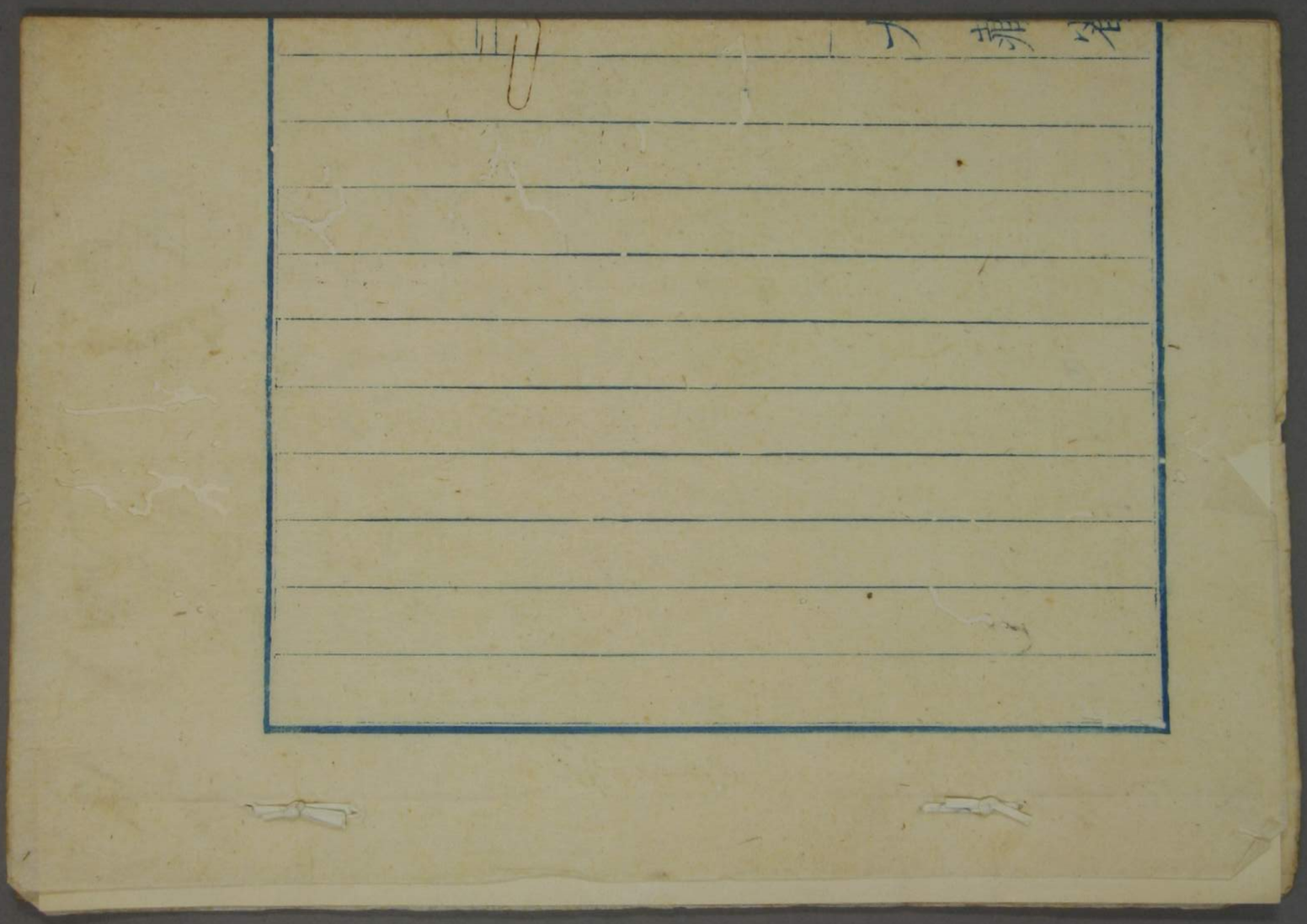
方今東洋銀行ト政府トノ間ニ行ハレタル他ノ約定アリ若シ其造幣寮ノ約定ニ違背スルヲ許セバ恐クハ他ノ約定ニ違背スルモ亦同社ノ權ナリト思量スベシ

約定ニ違背スルヲ許セバ必ス因テ生スル所ノ

弊害アルベシ即チ條約上ニ於テハ規則ヲ設立スルヿ外國領事ノ權ニアラズシテ而メ政府其設立スル所ノ規則ヲ許諾スルノ弊ト同轍タルヿ疑ヲ容レス然レモ政府既ニ其規則ヲ許諾シタルヲ以テ今之ヲ避ル能ハザルナリ

然則東洋銀行ニ對シ其言フ所何如ン即チ左ノ如クニメ可ナランノミ

子ノ約定ニ據レバ一月三十一日ヲ過ル所ノ約定ヲナスノ權ナシ是故ニ此ノ如キ約定ハ我政府ニ關渉ス可キ者ニ非サルナリ然リト雖モ我レ子ト特別ノ約束ヲ結ヒ因テ以テ各個ノ約定ヲ許諾スベシ

此ノ如クナレバ諸事鎮靜ニ歸スベシ且ツ政府モ亦茫乎トメ其所為ヲ察セザルヿナク又約束ヲ定メズシテ一個ノ約定ヲ許諾シ因テ其明知セザル他ノ諸約定ヲ許諾スル等ノ事モ有ラザルベシ

大藏省